令和７年度　静岡大学教育学部附属浜松中学校　学校評価書

学校教育目標

「自己を磨き　他とともに　よりよい未来を創造する子」
○自律・自立：自己のよさを知り、自己伸長を図る子ども
○共生・協同：「ひと・もの・こと」との関わり合いを大切にし、高め合う子ども
○創造　　：新たな社会的価値の創造に向かって自己実現する子ども

項目	目標・取組	評価指標	自己評価	診断・分析	学校関係者評価
学校経営	自己を磨き　他とともに　よりよい未来を創造するための資質・能力を育む。	自己の在り方・生き方に関心をもち、学習に取り組むことの意味を自分なりに理解している。（新規）	A	・附中生としての品位ある身なりや行動、公共のマナーについては、生徒は92%を超える高い達成度であるが、保護者は88%と少し意識の差がある。昨年度よりはともに向上した。年度当初にOBを講師に招き講話を行ったことで「質素・清潔・品位」という合い言葉の意識を高められたので、今後も継続したい。 ・一部、生活習慣や健康の問題から登校ができなかったり遅刻したりする生徒がいる。別室での対応が必要な生徒や外部の学びの教室に通う生徒もいる。別室利用のルールも定着し、ニーズに応じて効果的に利用できている。 ・「積極的に意見や質問を述べる」という項目は、生徒アンケートでは72.9%の達成度で増加した。また、できていないと感じている生徒も2.4%となり、やや減少した。 ・校舎一体化に伴い、異学年の交流は日常的になったと感じる。教育課程をすりあわせる中で活動を更に工夫していきたい。行事を通し、仲間と協力していこうとする姿勢が数多く見られた。 ・生活アンケートや教育相談を地道に行うことで、トラブルの早期の対応につながっているので、継承・継続していきたい。 ・小中の交流が増え、生活の仕方や文化の違いなども明らかになってきて、職員間の理解も進んだ。	・学校教育目標が共通しており、生徒も教職員もできることは何か考え、工夫して取り組んでいる。いじめの問題や学校の決まりなども、子どもが自らの課題としてとらえ、主体となって取り組んでいけると良いと考える。特にSNSの関係のトラブルが多かったので、未然防止の手立てを工夫して更に進めていきたい。
		附中生として品位ある身なりや行動をとることができるとともに、公共のマナーを守り生活している。	B		
		食事や睡眠、運動など、自らの生活習慣を見つめ、心身の健康づくりに務める。	B		
		疑問や興味をもったことをさらに深く追究したり、積極的に意見や質問を述べたりすることができる。	A		
		進んで環境美化に努めたり、社会に奉仕したりする。	A		
		周囲の人の気持ちを理解して助け合ったり、よりよい人間関係を築いたりする。	B		
		いじめ防止基本方針の見直しを図り、未然防止のカリキュラムを着実に実践する。（新規）	A		
		ウェルビーイングを意識し、自己の生活や集団をよりよくしようと創造的に取り組む。	A		
		小中一貫校として、より一層異学年との交流を意識した生活をする。	A		
	教育学部との協力の下で、地域の教育モデル校としての小中一貫教育プログラムの開発を推進する。	地域のニーズをとらえた小中一貫教育プログラムの開発を、実践を通して一層推進する。	A	・全体カリキュラムの中でMy Life領域に視点をあて教育研究を進めた。その成果を10月16日（木）10月17日（金）に開催した教育研究発表会で提案することができた。 ・レジリエンスの研究も継続発展させていきたい。	・小中一貫一貫教育の軸となるものが提案された。今後も研究の深化を期待している。
	浜松市教育委員会や地域の自主研究サークルと連携し、地域の教員育成に貢献する。	浜松市教育委員会、浜松市教育センターと連携し「浜松市6年経験者研修」を充実したものする。浜松市教育研究会との連携も進める。（新規）	A	・7月2日（水）「浜松市6年目研修」を実施した。浜松市内の121名の教員が参加した。小中教員による公開授業の参観や、静岡大学教育学部の教員による指導を行った。 ・一部の教科で自主研修が動いている。定期的な読書会も有志で行っている。また、浜松市の教育研究会の会場となり、研修を後押しできた。他の大学や医療との連携で行ってきた「中学生の野菜摂取量の増加のための働きかけ」の研究を終了した。	・浜松市教育委員会との連携で行う教員研修は、モデル校としての役割を発揮するよい機会になっていると思う。また、駐車場も整備されたので、今後も会場校として利用してもらえるようにしていくことが望ましい。
		地域の公立校教員を巻き込んだ自主研修サークルを充実させる。	A		
	地域に開かれた理数系人材育成を推進する。	大学・地域との連携による理数才能教育（トップガン）事業の充実を図る。	A	・「トップガン理数クラブ」「理科プレゼンテーションコンテスト」「Mathやらまいか」等を開催した。理科プレゼンテーションコンテストには中学生8名とSグループが参加した。 ・参加生徒が「科学の芽賞」や「サイエンスキャッスルワールド」で受賞するなど、研究の成果が数多く見られた。	・トップガン事業は地元企業も注目している。これをやりたくて入学してくる生徒もいる。継続発展していきたい
	働き方改革の推進による、教職員にとって働きがいのある学校づくりを推進する。	会議の終了時刻を17時45分とし、資料の事前配付、ペーパーレス化を図るなど会議の効率化による時間短縮を図る。	B	・勤務時間の弾力的な運用も利用し会議はほぼ規定通りの時刻に終了できた。事務サポートスタッフを配置したことで、教員の事務削減につながった。 ・令和9年度から部活をなくす計画を策定した。部活の時間や大会への参加なども見直しをした。SC・SSWも効果的利用しながら、様々な問題に対応することができた。カードを使用して勤務時間管理も定着した。主要行事の時期や内容を工夫することで、働き方改革は進んだ。更に職員の意識を高めたい。	・養護補助の非常勤講師、家庭への橋渡し役としてSCやSSWの導入は効果があった。働き方改革を一層進める意味でも、支援員などの配置を今後も考えてほしい。
		部活動の地域への活動移行への道筋にしたがって進めていく。	A		
		タイムカードによる出退勤管理をするとともに、学校行事や研究発表会の持ち方などの効率化・精選化を図る。	A		
教育研究	小中一貫教育を目指した新たな教育研究「よりよい未来を創造する子どもの育成」（4年次）の研究を小中合同で進める。	「よりよい未来を創造する子どもの育成」を目指し、9年間で目指す姿や育みたい資質・能力を明らかにし、授業改善を図る。（新規）	A	・部門を設定するなど、研究の進め方を工夫し、全員が同じベクトルで研究を深めることができた。 ・5年次は全体カリキュラムの中の「My Life領域」に視点をあて研究に取り組み、教育研究発表会で研究成果を発表することができた。	・2日間にわたる対面の研究発表会を行い、昨年より多い463名の参加者があった。小中9年間で育みたい資質・能力や、全体カリキュラムを提案できたことは大きな成果であった。 ・今後も、地域のモデル校となるように、発信を続けてほしい。
		全体カリキュラム論を元に実践を進め、My Life領域を核に各領域の授業を展開し一層推進する。（新規）	A		
		「よりよい未来を創造する子どもの育成」（5年次）の研究成果を教育研究発表会において発表する。	A		
	教育学部との連携協力を強化し、地域の教育界に貢献できるような先導的・実験的な教育研究を推進する。	共同研究者との連携により、小中一貫教育の成果を分析するとともに、全体カリキュラムの構築を図る。	A	・共同研究者との連携を進め、教育研究発表会において提案できた。その成果を一部の教科で論文等でも成果を発表できた。 ・継続している小中一貫のアンケートの取り方を検討して、一層研究に生かすことができるようにしたい。	・小中一貫教育による効果が地域の公立小中学校の先生方にも実感できる形で研究を進めてもらいたい。
		各教科において大学教員との共同研究を推進し、論文等で成果を発表する。	B		
教育実習	教育学部との連携の下で、教育実習の充実・強化に取り組み、より高い資質を備えた教員養成・研修に貢献する。	学部生に対する教育実習を通して教職への高い意欲と教員として学び続ける態度を育成する。	A	・教育実習Ⅱを5月12日（月）～30日（金）で実施し25名の学生を指導した。 ・養護実習Ⅰを7月7日（月）～11日（金）で実施した。 ・教職大学院基盤実習を6月5日（木）で実施し、25名が参加した。 ・教育実習Ⅲを9月1日（月）～12日（金）で実施し13名の学生を指導した。 ・学部4年生が教職キャリアプログラムにおいて、10月16日（木）17日（金）の教育研究発表会に参加した。 ・教育実習Ⅰを11月11日（月）～15日（金）で実施し、43名の学生を指導した。 ・体調を崩す実習生がおり、補充期間を設定したが完了できなかった。	・計画通りに教育実習が行えたことがよかった。学校の実態を知ることで、教員という仕事の魅力を感じてほしい。そして教員になるという夢を実現してほしい。
		教育学部における教職キャリア形成プログラム全体を見通した効果的な実習や講義を提供する。	A		
		教職大学院実習において、より高度な実戦経験の場を提供し、高い資質・能力を備えた教員養成に貢献する。	A		

学校評価総括

学校評価では、多くの面で数値が向上した。教育課程を工夫したり、様々な問題にも真摯に対応した職員の取組の結果と考える。しかしながら、生徒指導では、不登校傾向の生徒への対応やSNS関係のトラブルが増加してきているので対応を考えて取り組んでいきたい。第5回小中一貫研究発表会は、研究テーマを新たにして2年目の提案を行った。参加者は、昨年度より20名ほど増えた。教員の働き方改革について様々取り組んできた。部活動の方向性は固めることができたが、今後も地域の動向を踏まえて丁寧に進めていきたい。

次年度に向けて

○本年度も受験者数が増えた。継続して本校の魅力をしっかりと発信をしていきたい。
○小中での教育課程をすりあわせ、より魅力的な学校経営を進めたい。
○施設一体型の小中一貫校3年目を迎える。異学年の交流の機会を無理のない範囲で広げていきたい。
○小中ともに「教育課程特例校」として研究を推進してきた。これまで同様、ぶれることなく提案性のある研究を続けていきたい。